

(整理番号:)

活動の名称	チクゴガワリュウイキレンケイスイシンジギョウ 恵みに感謝し緩やかな連携で豊かな流域を 筑後川流域連携推進事業		
記入年月日	活動主体 (下記より1つ選択)		分野 (複数選択可)
	学校 企業 ○団体 個人 行政		○水防災・水資源○水環境○水文化・復興
活動主体の概要			
活動主体の名称	トクエイエリカトウホウジン チクゴガワリュウイキレンケイクラブ 特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部		
代表者名 (団体の場合)	ダタイ タダシ 理事長 駄田井 正	設立年月日	平成8年 任意団体設立 平成11年6月22日法人登記
住 所			
電 話		FAX	
E-mail	kic@kurume.ktarn.or.jp		
主な活動地	大分、佐賀、福岡、熊本4県の筑後川流域		
組織の概要 (個人の場合は履歴を記入)	筑後川フェスティバルによる連携の積重ねと筑後川流域研究プロジェクト (久留米大学) が土台となり、流域での環境と地域づくりに関わる個人や団体の緩やかなネットワークとして発足。4県を跨ぐ筑後川流域での活動には県境を越えた横の連携を大切に、山川海と繋がる水循環を思い持続可能な筑後川流域連携の実現を目指している。 正会員114名 賛助会員31社 寄付協賛会員6社 (27年3月31日現在)		
応募担当者 (代表者と違う場合記入して下さい)			
氏 名	コムラミツコ 小村 美都子		
住 所			
電 話		FAX	
E-mail		URL	
応募活動の概要: (300文字以内で記入して下さい)			
1. 昭和62年5月下流大川市から始まった筑後川フェスティバルを応援。 毎年流域内市町村を開催地として廻り欠かすこと無く開催し、来年30回を迎える。 2. 「筑後川新聞」年6回発行。今期末100号達成。筑後川流域まるみえの縮刷版を企画。 3. 筑後川流域は遊び・学び・仕事が一体化した創造的活動可能なテーマパーク。 4. 坂東太郎 (利根川)、筑紫次郎 (筑後川)、吉野三郎 (吉野川) と三兄弟契りを結ぶ。 5. 筑後川クリーンアップ支援隊を結成し、河川敷の定例清掃活動。 6. 放置竹林を憂え、竹の利活用模索。手づくり竹筏体験試乗会。終われば美味しかつぽ酒! 7. 九州一円と福岡県でのワークショップに毎年参加交流し活動手法を学ぶ。			
応募活動のアピールポイント: (箇条書き100文字以内で記入して下さい)			
○連携推進のための筑後川フェスティバル応援隊 ○情報共有の「筑後川新聞」発行 ○流域はテーマパークで元気印 ○流域間連携で暴れ三大河川縁結び ○流域美化にクリーンアップ支援隊 ○水循環のための竹の有効活用模索			
これまでの受賞歴:			
・H15/10/26西日本新聞社賞第3回九州川のワークショップin宮崎 ・H18/ 3/ 9地域づくり誌・ホームページコンテスト優秀賞(地域活性化センター会長 (元総務省自治財政局長)) ・H22/ 8/ 3水シンポジウム福岡実行委員長感謝状 (京都大学教授中川一氏) ・H25/7/19地域協働河川管理推進功労表彰 九州地方整備局長 ・H25/11/7社会奉仕活動更生保護補導援護協力表彰 法務大臣 ・H27/2/28地域振興貢献地域づくり活動賞 地域づくりネットワーク福岡県協議会会長 (福岡県企画地域振興部長)			
※日本水大賞への既往応募歴: なし (第8回で国土交通大臣賞を受賞した筑後川まると博物館運営委員会とは協力関係ですが別組織です)			
「日本水大賞」をどこで知りましたか? (数字に○印を付けて下さい)			
1. 新聞広告 2. 官庁内ポスター ③. 協会ホームページ ④. 協会からの誘い ⑤. 国の機関からの誘い 6. 県・市町村からの誘い 7. 教育関係機関 8 その他 ()			

活動の概要

目的：九州一の大河筑後川は大分、熊本、福岡、佐賀の4県に跨り流域面積は2,860km²の広大な流域です。はるか昔から人との関わりは深く長く、自然の厳しさに直面しながらもたくさんの恵みを頂きながら紡いできた豊かな自然や暮らし、文化や産業などを見直し県境を越えた山川海へと繋がる流域としての視点からその活用を探り、筑後川の「恵み」とともに後世に伝えつないでいく。

そのため人々の**遊び・学び・仕事**が一体化した創造的活動の舞台としての筑後川流域づくりを目指す。

内容：(活動は有志が集まる自主自発的なもので基本的に手弁当参加しています)

1. **流域連携推進と活性化** 筑後川フェスティバルは昭和62年5月「川との関わり」をテーマに大川市で開催されました。継続の予定はなかったものの、時の宮崎町長が「小国で開催する！」と宣言し第2回大会へと繋がりました。上流から中流下流まで流域のそれぞれの特徴を生かし地元の物産展などとコラボしながら途切れることなく続いて来ています。

平成8年第10回久留米大会で流域連携を深めるための人材育成と情報ネットワーク、連携の基盤強化のため、筑後川流域連携倶楽部(当会)が発足し、筑後川フェスティバルの支援母体となり、実行委員会に参加することで企画運営に協力し、開催時のスタッフの動員にも協力するなど、フェスティバルを応援しています。平成9年には流域外であるものの、筑後川の水を利用している、福岡都市圏で初めて開催し、水は限りある資源であるとその大切さをアピールしました。

下流域での開催時には、森川海から有明海に注ぐ水環境を守るには上流日田市での森づくり(水の森)が大事として認識し、中流域のフェスティバル開催では流域住民コンセンサス会議を重ね森川海と繋がる上流の森づくりを中流下流域の市民が協力し合い、植林や下草刈り、竹林伐採活動をすることができました。平成13年11月には、当活動が国土交通省総合政策局から「次世代の地域づくりのモデル的実践地域」に指定され活動にますます弾みがつきました。

来年、筑後川フェスティバルは何と第30回を迎えます。フェスティバル発祥の原点の街大川市で開催されます。第1回大会当時、大川青年会議所の川への「熱い思い」の有志たち(川河童たち)が中心となりました。今回、流域の川河童たちはすでに開催へ向けて活動を始めています。

2. **流域の情報共有と発信** 広い流域での連携活動には情報共有と発信が必要と、筑後川新聞を企画発行。年6回、1万5千部発行。流域18市12町1村と会員及び関係各所に配布している。今年度末には100号達成します。平成11年創刊当初は西日本新聞社のスタッフ皆さんに依存する形でスタートしました。現在では流域内で活動する**筑後川まるごと博物館運営委員会**の皆さんの力を借りながら流域での取材や企画編集を熟し独自の編集スタイルを貫いてきています。流域4県知事対談シリーズや流域首長会議、流域に生きるシリーズは好評です。また、流域の歴史や風土美しい風景や流域活動全体がまる見える100号縮刷版の出版をも企画中です。頁をめくれば流域の詩が聴こえてきます。(新聞一発行費:70~100万円)

3. **流域の元気** 筑後川流域をテーマパークとして捉え、遊びと学びと仕事を一体化した創造的活動の舞台としての流域づくりは「川の駅」に集い繋がり「筑後川まるごとリバーパーク」流域巡りで遊び、「筑後川まるごと博物館」で学び、流域の地産地消の「筑後川まるごと市」を交流の場として中流久留米市中心街に店主(会員)の協力を得て今秋オープンしたばかりです。

4. **流域間連携** 平成17年9月より吉野川との交流が始まりました。利根川との交流も始まり平成24年9月30日徳島市において、念願の坂東太郎、筑紫次郎、吉野三郎大河3兄弟の縁結びに調印。情報交換、相互訪問の促進、文化活動の推進、災害支援など積極的に協力することなどについて協定書に調印しました。交流を重ねながら、流域に生きる知恵と工夫と勇気を分かち合い、九州流域の枠を越えて日本の流域連携交流活動が始まりました。国内初の河川同士の縁組です。

5. **流域美化** クリーンアップ支援隊活動は平成20年より設立10周年記念事業として活動開始。筑後川防災施設くるめウスに毎月第2土曜集合し、筑後川河川敷と高良川周辺をクリーンアップ。定例化して継続している。青少年の更生プログラムとして組込まれ、川活動を通じて社会復帰のお手伝いをしている。地域、企業、行政など老若男女の個人、団体と参加者は増え続けています。

6. **森川海水循環** 放置竹林で山林が荒れることに心を痛み、憂え、「何とかせなん！」と竹を活用した竹筏レースや体験試乗会を企画し今年10月に4回目の大会を開催。体験会が終われば竹器のかっぱ酒。美味し！楽しみながらまた、憂えながら環境意識の啓発にとH26年度は福岡県と竹林サミットを開催し、竹の利活用を探りながら里山保全を模索中です。また、話題づくりの一環として、手作り竹筏の長さのギネス記録を密かに狙っています。

7. **水環境情報共有** 九州「川」のワークショップは通算15回を迎え、今年度は11月14・15日諫早で開催されます。福岡県版のワークショップ「ふくおか水もり自慢！」は通算12回を迎えます。今年度は12月6日に遠賀川で開催されます。九州20河川の流域と県内で活動する個人や団体、企業、研究者、行政が一堂に集まり流域それぞれの活動や悩み、活動の手法や技術を学び共有し交流し活動の糧を得ます。

活動期間 自 平成 8年 6月～ 至 平成27年 10月(通算 19年 4月)

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入してください。

昭和62年～筑後川流域圏を対象にした経済社会的な調査活動

活動の必要性・緊急性： 広大で変化に富んだ筑後川流域の各地で川に育まれた産業、文化、歴史、地勢、水源などはどれをとっても人々の暮らしとともにあり、歴史あふれる宝に満ち溢れています。筑後川の宝を再認識し見つめ直して観光資源として活用できれば流域も活性化できると駄田井理事長は流域各地に足を運びながら連携交流の夢を紡いできました。筑後川流域連携倶楽部は、流域交流→流域連携→流域の宝発見→流域観光資源活用→流域活性など思い描き実現可能な事業を模索してきました。それは流域が遊び・学び・仕事と一体化した創造的活動の舞台となり、豊かな流域へと繋がっていくと考えています。

全国的に少子高齢化と過疎化が進み、地方創生が求められる今だからこそ、県境、市町村境といった行政の境界を超えた流域という視点での市民レベルの交流連携から地域活性化を目指す活動には大きな意義があり、更には一億総活躍社会の一翼を担うことへ繋がっていくものと思います。

活動の効果・社会への波及効果： ・連携交流をキーワードに筑後川フェスティバルは流域各地を巡り絶えることなく開催され、来年は原点の街大川市で30回大会を迎えます。継続の成果として上流日田市で、中流下流の市民と共に森づくり活動が始まりました。

- ・流域連携は情報共有が必要と発刊された筑後川新聞は今年度100号を達成し一冊の縮刷版となります。流域の歴史や今を生きる人々を映し出し、流域丸ごと丸見えのビジュアルで中身の濃い資料価値のある情報紙となっています。情報共有することで水環境、水文化や水防災などについての意識啓発を継続することができ、流域住民へ筑後川への興味と関心を常に喚起してきました。
- ・川の駅は流域の公共施設や美術館や老舗旅館やホテルなど現在27カ所を連携ネットワークし、川の駅を廻れば流域に人々が訪れる仕組みをつくりました。今春実施したスタンプラリーは好評でした。筑後川まるごとリバーパークは流域をツアーで巡りその魅力をくまなくアピールしてきており、筑後川まるごと市では常設の交流市場に物産物販スペースを併設し久留米市中心街に会員の協力を得て今秋開設することができました。
- ・日本三大暴れ川である坂東太郎、筑紫次郎、吉野三郎の三兄弟契り交流も毎年相互にフェスティバルに参加し、市民レベルの流域間防災連携、災害支援に積極的に協力するなど協定を結びました。カンパを呼びかけ資金的な協力をする。今年の利根川交流では、関東・東北豪雨への見舞金も持参します。
- ・筑後川河川敷、高良川河川敷の清掃も定例化して継続し、企業の参加協力、若い参加者や子どもの参加も増え続けている。法務省の青少年更生保護プログラムに活用されたりとその役割も拡大してきています。
- ・筑後川防災施設「くるめウス」を拠点に子どもも大人も参加できる防災教室を開催や、川での生き物観察、化学的水質調査、カヌー体験、リサイクル工作教室を実施し毎回好評を得ています。
- ・更に放置竹林を憂えて竹の有効利活用を模索し、環境保全のための活動に発展させていきたいと思っています。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：

筑後川流域圏は県境を越えて経済的社会的に活動しており、上流から中流下流と多様で様々な人が集うなかでの活動は①楽しく②夢を語り③継続し④次代へ繋ぐを心がけて活動しています。「遊び」「学び」「仕事」が一体化した創造的活動を可能にする舞台として流域を捉え、川の駅に集い、筑後川まるごとリバーパークで遊び、筑後川まるごと博物館で学び、筑後川まるごと市で仕事と一体化を目指していきたい。流域への思いは深く活動が広がれば広がるほど資金不足に陥るのは世の常で、補助金や助成金を活用したり、発行事業「筑後川新聞」では企業に応援を依頼したり、協賛協力を手探りしながら事業毎に工夫をしてきています。

活動の今後の計画： 九州一の大河筑後川の恵みを頂きながら、流域住民とともに、行政の知恵と力と協力を仰ぎながら、筑後川という自然条件を要とし緩やかに連携交流する地域づくりを目指すこれまでの活動を引継ぎ次代へつなぐための人材育成に取り組みつつ筑後川流域を遊び学び仕事する創造的活動の舞台として充実するため、特に筑後川まるごと市と川の駅ネットワークの強化、水環境に繋がる流域の山林や里山保全活動も推進していく。流域間交流も更に深く情報共有していく。筑後川流域への夢は果て無く続きます。

応募推薦者（必要な場合にご記入ください）

氏名		推薦の言葉：
所属		
電話		
氏名		推薦の言葉：
所属		
電話		

坂東太郎
(利根川下流)

四国三郎
(吉野川中流)

発行/特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部

筑後川・矢部川まるごと情報

日本三大暴れ川、 兄弟縁組締結成る!

「日本三大暴れ川」として古来有名な坂東太郎・筑紫次郎・筑後川、四国三郎・吉野川の三河川の関係者が集い、9月30日徳島市において飯泉徳島県知事等立ち会いのもと、兄弟縁組式典が行われました。このような河川同士の縁組は国内で初めてで、相互の交流の促進や災害支援協力などについての協定書に調印しました。



三大河川兄弟縁組調印式



ダルマに目を入れる飯泉徳島県知事(左)と筑後川の駄田井理事長(右)

THE CHIKUGO
RIVER NEWS

新聞



高良大社神幸祭 10月14日
久留米市御井町 撮影:羽田史郎

2012
冬号
vol.80

三大河川交流イベント

徳島市に兄弟川集う!

9月29日・30日 徳島県徳島市あわぎんホール

吉野川交流推進会議、国土交通省徳島河川国道事務所、徳島県の主催で「恵みの宝庫、吉野川創造イベント」が開催され、三大河川交流イベントが行われ、坂東太郎(利根川)、筑紫次郎(筑後川)、四国三郎(吉野川)の関係者が徳島市に集いました。

川のワークショップ

29日午後、三大河川流域で活動する市民団体等が、それぞれの活動内容を発表・意見交換を行いました。各河川から4~5団体ずつ、合計14団体が次々と発表。熱心な質疑応答が行われ、太郎賞、次郎賞、三郎賞が選定されました。



交流会

29日、夕暮れ時より新町川浮き橋において、三大河川の関係者約100人が集い、交流会を行い親交を深めました。朝からの雨にもかかわらず、熱気あふれる会場は夜遅くまで談話の和が広がっていました。

三大河川「兄弟縁組」調印式

30日午前、台風接近のため急遽時間をくり上げて実施され、約120人が参加。飯泉徳島県知事、小林徳島河川国道事務所長など立ち会いのもと、三大河川の関係者として福成孝三氏(利根川流域交流会会長)、福永義和氏(吉野川交流推進会議会長)、そして筑後川の駄田井正理事長の3人が協定書(右)に調印しました。その後、利根川上流の高崎市の名産「高崎だるま」が三河川にそれぞれ用意され、各代表、知事により目が入られました。

坂東太郎(利根川)・筑紫次郎(筑後川)・四国三郎(吉野川)
三大河川の兄弟縁組締結に関する協定書

利根川流域交流会・特定非営利活動法人筑後川流域連携倶楽部・吉野川交流推進会議の三者は、日本三大暴れ川である坂東太郎(利根川)・筑紫次郎(筑後川)・四国三郎(吉野川)における、これまでの相互交流と水環境の研鑽を礎として、更なる理解と友好を深めるため、ここに各河川の代表として「三大河川の兄弟縁組」を締結する。三者は、この縁組を契機として、互いに流域の人々の友好を深め、各分野における交流を促進するため、情報交換や相互訪問、会議の開催や文化活動の推進並びに災害支援などにおいて、互いに積極的に協力することにより、関係者の交流がますます活発化し、河川文化の相互理解が深まり、更なる友情の絆を築くとともに、各河川流域においても相互の発展に寄与するものと確信する。また、この「三大河川の兄弟縁組」締結の取り組みが、今後流域を超えた河川を通じた水文化の交流の礎として、我が国から世界へと広がっていく、きっかけとなることを期待する。以上、合意を確認するため、この協定書に署名する。平成24年9月30日 徳島県郷土文化館(徳島市)

坂東太郎(利根川) 利根川流域交流会 福成 孝三
筑紫次郎(筑後川) 特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部 駄田井 正
四国三郎(吉野川) 吉野川交流推進会議 福永 義和
※協定書ホームページ「坂東太郎(利根川)・筑紫次郎(筑後川)・四国三郎(吉野川)の縁組締結について」より引用しております。



三大河川・流域交流への期待

公益社団法人 日本河川協会会長 虫明 功臣

江戸時代から日本の三大暴れ川とされていた利根川、筑後川、吉野川。暴れ川であるがゆえに、形成された肥沃で生産性の高い沖積氾濫野において、洪水と戦いながら豊かな恵みを得る営みの歴史と文化をもっています。それぞれの河川流域、そして流域の中での各地域で川と土地の特徴に合った洪水対策と用水開発が行われ、特産物を生産し、それらは川を交通路として流通していました。明治時代まで、河川流域はその中の地域コミュニティを繋ぐ文化圏・経済圏でした。これがそれ以降の鉄道・道路による運輸・交通体系によって極めて影の薄いものになってしまいました。

縁組を結んだ利根川流域交流会、筑後川流域連携倶楽部、吉野川交流推進会議はいずれも、流域内の河川美化・愛護、川と水辺を軸とした地域おこし・まちおこしなどを行う諸団体をネットワーク化した連合体であり、現代に即した新たな流域文化・経済圏の構築を目指しています。この縁組に基づく交流と連携によってこうした活動がますます深化・拡大することは、日本が元気を取り戻すことに繋がると、大いに期待しています。



三河川兄弟縁組から生まれるもの

特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部 理事長 駄田井 正

飯泉嘉門徳島県知事、虫明功臣日本河川協会会長などの方々の肝いりで、7年間にわたる交際の期間を待って、三河川の兄弟縁組が実現しました。関係者一同の喜びはひとしおです。この縁組を契機に三河川にかかわる情報や人々の交流がすすむことで、今までなかった出来事や試みが生まれることと期待できます。

三河川流域での観光や物産販売などに新しい刺激となることは無論のこと、教育・医療・福祉などにも河川を活用することでの新しい展開が期待できます。そして私が何よりも期待していることは、この縁組が日本再生につながることで、少子高齢化と過密過疎化が、持続可能な社会を築くための日本社会が抱える根本的な課題です。この課題を乗り越えるには、流域単位で対応していくことが、錯綜した利害の糸をはくすもとであることを、縁組からの成果が提示すると思えるからです。

みんなでつくろう、きれい川、ちっさ川

(筑後川クリーンアップ支援隊の清掃活動です)

筑後川クリーンアップ活動に参加しませんか。

NPO法人筑後川流域連携倶楽部では、私たちのふるさとを守り育ててくれる母なる大河筑後川に感謝し、いつまでもきれいな川を未来へ伝えようとこのたび筑後川クリーンアップ支援隊を立ち上げました。流域の皆様と共に、ささやかでも広がりのあるクリーン活動を目指していきます。

■くるめウス周辺河川敷の清掃活動

6月13日、連携倶楽部10周年事業で発足した「筑後川クリーンアップ支援隊」の第1回目となる清掃活動が、8:30より約1時間、くるめウス周辺の筑後川、高良川周辺河川敷で実施され、子供たちや学生、家族も含めた約30人が参加して行われた。自転車の他多くのゴミが集められた。

この活動は今後、毎月第2土曜日に行います。

お問合せ先:090-2391-5326(支援隊長:阿部展明)



※次回は8月8日(土)8:00にくるめウス玄関前集合です。

■朝倉・堀川の清掃活動

三連水車周辺の環境を守ろうと、地域住民が「堀川の水を守る会」を発足させ、5月31日に地域20地区の有志400名、比良松中、大福小、朝倉小の130名が参加して堀川の清掃活動をおこなった。

5月29日筑後川連携倶楽部結成10周年を記念して筑後川クリーンアップ支援隊を立ち上げたばかり。河川清掃の情報が朝倉の矢野公子さんより寄せられ、支援隊の阿部が現場を訪問。次世代を担う子供たちの多くの参加に感動。グループごとにてきばきとした作業で、2時間で軽四輪10数台分のゴミが集まる。

「皆様、本当に お疲れ様でした」心地よい感動を胸に帰途についた。

(支援隊 阿部展明)



筑後川(水天宮)花火大会翌朝の8月6日(木) 午前6:00~7:00 長門石橋西岸を清掃します。ご参加をお願いします。

盛会だった第11回ふくおか水もり自慢in北九州

2014年12月20日、北九州市立大学北方キャンパスで「ふくおか水もり自慢」が行われました。

今年は11回を迎えました。みずもり自慢は、県内の水環境の保全に関わる活動をしている団体や関係機関が集まって交流し、団体間の交流や行政と市民団体のパートナーシップを推進するための場です。

特別報告の他に46団体からの活動報告がなされました。その中でも子どもたちの発表がすばらしかったと思います。筑後川まるごと博物館の子ども学芸員の4人も発表しました。県庁の皆さんやはかたん海援隊のパフォーマンスや「紫川サンバ」のフィナーレに会場が盛り上がりました。

わずか3分という短時間で取り組みを発表しなければならず、内容に発表方法に知恵を絞ったあとがうかがえました。参加者は、それぞれの発表の中からきらりと光る物を感じ取ります。

今年も多くの光る物を感じ取ることができました。他の団体の取り組みの中から見つけた光るものや手法を学んで、今後の活動の参考にしていきたいものです。

盛会であった「水もり自慢」を支えた地元実行委員会や学生スタッフの協力、努力を忘れてはなりません。



会場風景



くるめウスで活動する「子ども学芸員」が次々と発表



フィナーレの紫川サンバ

←左:筑後川まるごと博物館の発表(電子紙芝居)
右:筑後川流域連携倶楽部の発表(クリーンアップ支援隊)

第12回九州「川」のワークショップin福岡開催

10月6・7日 福岡市・福岡大学 記事/鍋田康成



大人達の前で発表する子供達

「川のリスクに向き合い、水の恵みを地域のために活用するためのワークショップ」として、九州内の水に関わる個人や団体35団体が集まりました。日頃の活動成果を発表し、川が抱える課題などを討論するなどしてお互いの交流を深めました。

1日めは、7月の豪雨水害について九州各地からの報告があり、今後の連携について話し合い、また子ども達の活動発表が行われ、くるめウスで活動する中学2年生も「ぼくはキッズボランティア」として発表しました。また九州大学島谷教授より「小水力発電を地域のために」としての問題提起もありました。

2日めは、午前中一般の31団体の発表があり、最後に「水害を契機に九州流域連携」や「災害復旧時に守るべき環境」について全員で討論し、大会を終えました。